

桜花爛漫、年々桜の開花も早くなり、四月になれば、花も散り初める事でしょう。

一寸先は闇では無く、仏の光は全ての世界を照らす光明遍照十方世界と有るごとく、見えない光では有るが、人生劇場に於いて、光輝いて欲しいものである。仏教で言えば「善因楽果・悪因苦果」であるが、娑婆の現実を見ますと、どうもそうでは無い事が多いように思われます。佛の教えに伴りは無いと確信はしたいのですが。それでもマナー違反をしてまでも欲望に沈む方がみえます。法然と親鸞が提唱した念仏宗が念仏申せば誰でも救われるとした拠こには納得できない自分がいることも事実です。然し乍ら、良く考えてみますと、阿弥陀如来様の名を称となえる事に因よつて、「正直者はバカを見る」世界から離れ「嘘うそから出た真」に身を変じて行けるようになるのではなからうか。「念仏往生義」に、「佛は・・・善人を見ては悦び、悪人を見ては悲かなしみ給たまえるなり。善き地に善き種を蒔まかんがごとし。かまえて善人にして、しかも念仏を修すべし。これを、真実に仏教に従う者というなり。」と、申されました。世界には様々な宗教がありますが、世界の皆々が善行に勤いとしみ身を清く保つ事に因よつて世界平和が実現すると思えます。坂村真民の詩に「死のうと思う日はないが 生きてゆく力がなくなる時ときがある そんなとき お寺を訪ね私はひとり 仏陀の前に座まつてくる 力わき明日を思う心が 出てくるまで座まつてくる」。「佛さまは、どこにもいなさる」という体験をさせてくださる旅のありがたさよ」と、私も同行の皆様と四国霊場等参拝していますが、清々しい気持ちになり、力が身に満ち、お助けで山上にある本堂たどに辿り着く事ができます。仏法とは涼しき風なのである。お宮に参拝すれば「阿吽あうん」の「狛犬こまぬ」が出迎えてくれ、お寺に参拝すれば、阿吽の仁王様が出迎えてくれます。普通は「阿」で生まれ「吽」で死んで往いくと言う自然の生業なりわいを意味していますが、私は「阿」で活を入れられ、「吽」は菌を食いしばって、頑張りなさいと、言っているように思えてなりません。このように考え人生訓として受け止めています。一遍上人は「念仏の行者は知恵をも愚痴ぐちをも捨て、善悪の境界をもすて、貴賤きせん高下の道理をもすて、地獄を恐るる心をもすて、極樂を願う心をもすて、又、諸宗の悟りをもすて、一切の事をすてて申す念仏こそ、彌陀超世の本願にもつともかない候まうひへ」と、捨てきれないのが現実では、あります。お釈迦様の教えに、「もし思慮に富み、正しく行い賢者なる同行の伴侶を得たならば、かれと共に行け。そうでなければ、独りで行け、愚者を伴侶としてはならない。人は劣った人に親しむならば、下劣のものとなり、等しい人に親しむならば、退くことがない。優れた人につかえるならば、速やかに上に進む。だから自己よりすぐれた人に親しみつかえよ。」以上、中村 元教授訳。お釈迦様は最後に弟子たちに向かつて、「自己の心を師と為なす、他に従って師と為さざれ、己を師と為す者は、眞に智人の法を獲」と、これ即ち、「己を燈とし、法を燈とせよ」と、言うことであり、自燈明、法燈明の教えです。法の元で、自分が自分を師としての行動が取れるか、否いなかであります。過剰な欲を抑えることができるか。身を正しく保ち、心を清く正しく整え、悪言を吐かず、怒る事無く、悪を遠ざける事ができるか。心は人を仏にもするし、畜生ちくじやうにも、鬼にもする。だから道に外れる事の無いように、精進しなさいと、お諭たましにられました。

令和三年四月一日

善壽男善入院油樹地藏尊